

黙示録11章1-2節 「妥協した神殿」

1A 回復の神殿 1

2A 異邦人の蹂躪 2

1B 外庭

2B 聖都

本文

黙示録 11 章です。私たちは前回、10 章で、力ある御使いが、神の奥義が、預言にあるとおりに実現すると告げていました。そしてその巻物をヨハネが食べ、口には甘かったのですが、腹に苦くなりました。11 章から見ていく預言は、これまで語られていた預言で、とても込み入った部分、けれども核心的な部分に入っていきます。それは「神殿」です。(1-6 節を読む)

主が、エデンの園を人のために造られ、そこに主が歩かれておられました。それはまさに、主の住まわれる宮、神殿と呼んでいいでしょう。そこから罪を人が犯したので追放されました。しかし、主は、幕屋を造るようにモーセに命じられました。その聖所に主が住まわれるためです。主は、私たちの間で住まわれたいと願っておられます。そして、約束の地に入って定住した民に対して、ご自身の選ばれた場所に、とこしえに立つ神殿を約束されました。ダビデはその幻を受けて、息子ソロモンに、かつてアブラハムがイサクを献げようとしたモリヤの山に神殿を建てたのです。

しかし、その神殿は、彼らの背きの罪、偶像礼拝で、バビロンによって破壊されました。七十年後に、主が帰還を許され、総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアが率いて、エルサレムに神殿を再建しました。そして、その神殿が、イエス様がお生まれになる少し前に、ヘロデ大王が大規模な改築をすることになります。それが、福音書や使徒の働きに出てくる神殿です。

しかし、ここ 11 章に出てくる神殿は、その神殿ではないのです。黙示録がヨハネに与えられたのは、紀元 90 年代です。けれども、この神殿は紀元 70 年に、ローマによって滅ぼされています。イエス様が、弟子たちに、「マル 13:2b この大きな建物を見ているのですか。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」と言われたことが、成就しました。そして、この歴史の中で、たった今もそこに神殿が建てられていません。ということは、ここ黙示録 11 章に啓示されていることは、過去のことでなく将来のことです。将来、神殿が建っていることです。

ユダヤ教の人たちは、今でも神殿が再建されることを待ち望んでいます。預言者ゼカリヤに、主が約束されました。「ゼカ 6:12-13 万軍の【主】はこう言われる。見よ、一人の人を。その名は若枝。彼は自分のいるところから芽を出し、【主】の神殿を建てる。13 彼が【主】の神殿を建て、彼が威

光を帯び、王座に就いて支配する。その王座の傍らに一人の祭司がいて、二人の間には、平和の計画がある。」この若枝は、メシアのことです。私たちはイエスがメシアであることを信じていますが、ユダヤ人の人たちはそのように信じていません。メシアが来れば、この方が神殿を建ててくださると信じています。

そしてエゼキエルが、神殿を神が回復してくださることを預言しています。40 章以降に、神の国における、ソロモンやヘロデの神殿よりも、はるかにすぐれた、栄光に輝く神殿が建てられることが預言されているのです。それは、私たちはイエスご自身が建ててくださり、その神殿に入られて、世界を統べ治められると信じています。それが、黙示録 20 章によれば、千年間の統治であり、千年王国が終わると、今の天地万物は過ぎ去り、新しい天と新しい地で、天からのエルサレムが降りていて、そこが永遠の都となります。そこは神殿を必要としません。なぜなら、主ご自身がその都に住んでおられるからです。

このように主は、ご自分の民の間に住みたいと願われています。今は、主は聖霊を降り注いでくださり、神殿という建物ではなく、私たち信じている者たちを御霊が住まわれる神殿としてくださいました。私たちが主の御名で集まるところに、聖霊がおられて、主と共に住まれ、主の栄光を仰ぎ見ることができるようにしてくださっています。

話をエルサレムの神殿に戻します。今は、神殿がない状態です。神殿の丘には、紀元後七世紀からずっと、岩のドームがあります。その中に、アブラハムがイサクを献げようとしたモリヤの山の岩の一部があり、そこが神殿の至聖所であったと言われているところです。けれども、イスラム教では、ムハンマドが、そこから昇天したという言い伝えを信じています。このような中で、神殿の丘の西壁の一部である、嘆きの壁のところがユダヤ教徒にとって、神殿に最も近いところとして、最も聖なる所です。メシアが来られること、そして神殿が建てられることを祈りつつ、嘆きの壁で祈りを献げています。

ここで大事な啓示があります。ダニエルが、破壊されたエルサレム、その都と聖所に憐れみをかけてくださいと祈っていた時に、ガブリエルが来て、七十週が定められていると預言しました。確かに神殿が建てられるのですが、最後の一週の前に、メシアが断たれて、残りが荒廃するという預言があるのです。果たして、歴史でそれが起こって、異邦人が神殿を滅ぼし、異邦人が踏みつづす歴史がエルサレムに続いていました。しかし、最後の週、第七十週目があります。そこで、神殿が再建されるという約束があります。ところが、その男は、ユダヤ人を滅ぼし尽くすことを意図し、世界に荒廃をもたらす、荒らす忌まわしい者であります。反キリストのことです。「9:27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」ですから、確かに主は再び来られて神殿を建てられるのですが、その前に、偽キリストによっ

てユダヤ人が契約を結び、それで神殿が建てられるのです。最後の週、つまり七年間ですが、その半ばに彼は、いけにえとささげ物をやめさせます。そして、ユダヤ人を迫害し、世界に荒廃をもたらすのです。

その上で、11章の神殿の幻があるのです。13章に入れば、獣の宮が出きます。11章から13章までに、神殿が荒らされて、獣の宮になってしまう預言が続きます。

1A 回復の神殿 1

1 それから、杖のような測り竿が私に与えられて、こう告げられた。「立って、神の神殿と祭壇と、ここで礼拝している人々を測りなさい。

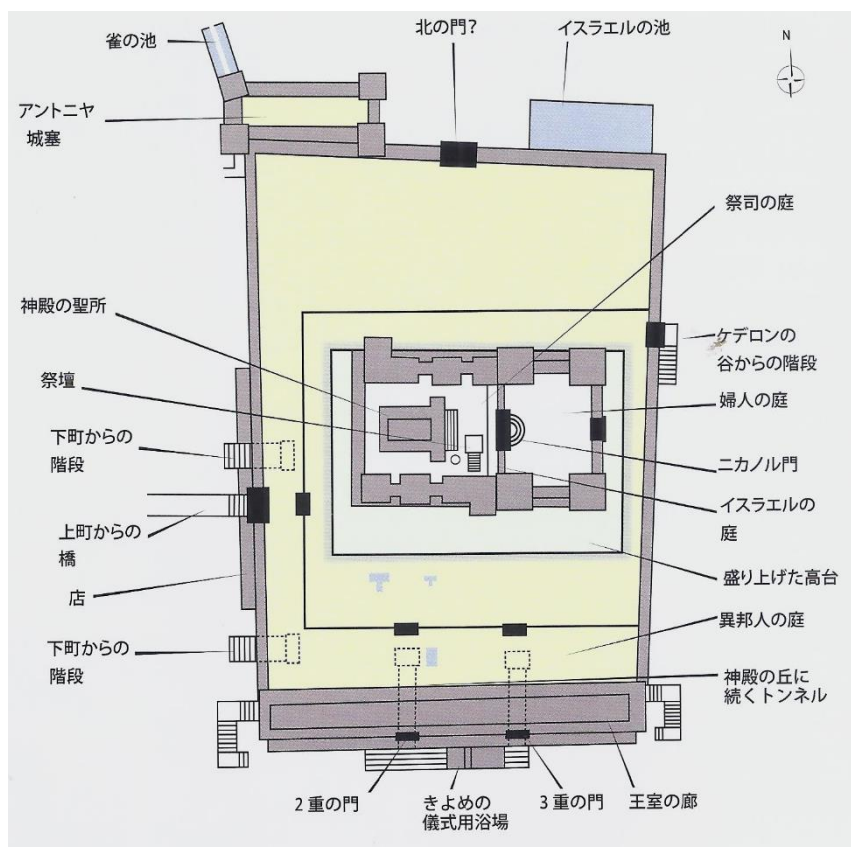
「杖のような測り竿」ですが、これはヨルダン川の岸边に育つ葦で、成長すると6尺ほどになるそうです。それが測り竿として使われていました。エゼキエルの見た幻を私たちは読みましたが、40章以降に神の国における神殿の幻がありましたね。そこに、神殿の寸法を測るために、手に六キュビトの測り竿を持っている人がエゼキエルに神殿の寸法を教えていた場面があります(40:5)。同じように、ゼカリヤ書にも、測り竿を持っている幻があります(2:1-5)。測り竿というのは、それが神のものであるという、神の所有であることを示すためのものです。今、神殿と祭壇、そして礼拝している人を測るのですが、主はこれらのものは神のものであるということを言い表しています。

2A 異邦人の蹂躞 2

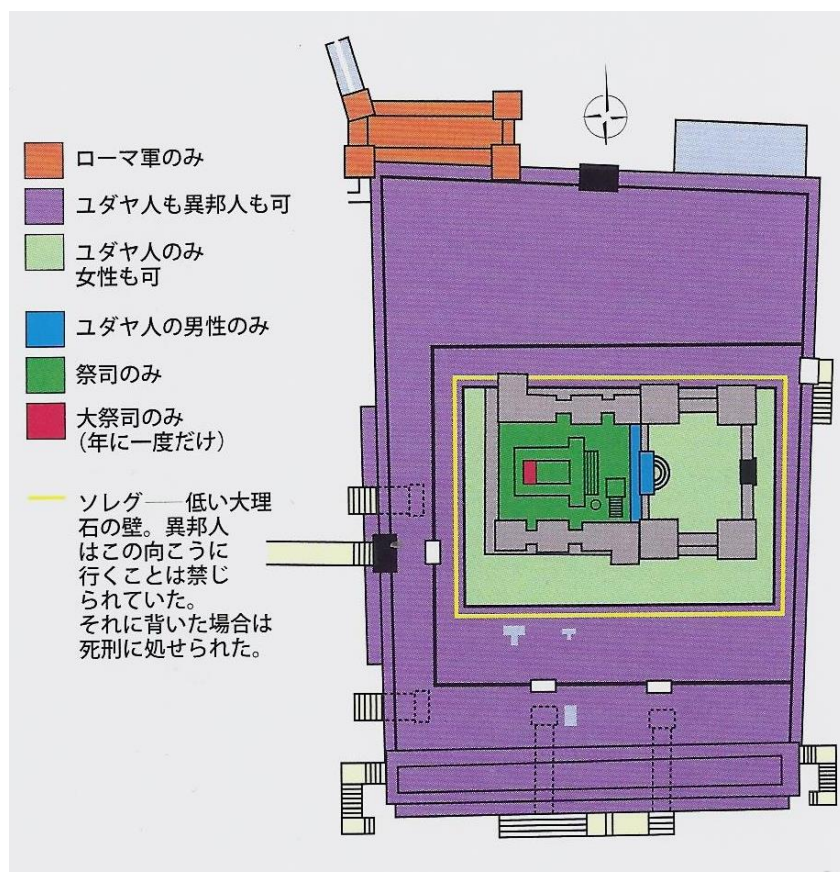
1B 外庭

2 神殿の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはいけません。それは異邦人に与えられているからだ。彼らは聖なる都を四十二か月の間、踏みしめることになる。

「外の庭」とあります。神殿の境内には、いくつかの区画があります。一つは祭司だけが入ることのできる、祭壇のあるところ、そして神殿そのものです。祭司が入って、供えのパンの机



や燭台、香壇があり、そして至聖所に入ることのできる、その区画です。それからヘロデの建てた神殿であれば、イスラエルの成年男子だけが入ることのできる区画があります。「イスラエルの庭」と呼びます。そして女性も含めて、イスラエル人が入ることのできる「婦人の庭」があります。やもめが献金箱に一レプタを入れたというのは、その中で起こった出来事です。



そして、「外庭」があり、そこは異邦人も入って来て良い所であります。ヘロデ神殿は、「異邦人の庭」と呼ばれていました。しかし、この神殿では、「そのままにしておきなさい」とあります。これは直訳では、「外に投げなさい」という意味です。つまり、神の所有の区域ではないということです。これは、単純にヘロデ時代の神殿の「異邦人の庭」以上の響きがあります。ヘロデの神殿においては、異邦人が改宗者としてこの中にまで入って来ることができました。ヨハネ 12章で、ギリシア人がピリポ

のところに来て、「イエスにお目にかかりたい」と言ったのは、この異邦人の庭においてかもしれません(12:21)。しかし、ここは「外に投げなさい」という意味ですから、つまり、神を敬うところできえなく、異教徒に全く明け渡されているのだ」ということです。

これは、明かに妥協した神殿です。私たちにも、教会において、「どんな人であっても、悔い改めてキリストのところに来ることができる」という広い間口があります。聖餐式の時は、はっきりと信者だけがあずかることができます。けれども、中に入れますね。そういった広い間口がありますが、「罪を教会の中に許す領域がある」ということは、許しません。例えば、仏壇に手を合わせる方が教会にいらっしゃることは大いに歓迎です。しかし、教会の中に仏壇を持ち込んで供えをすることがあれば、お断りしますね。けれども妥協して、一部を仏壇にお供え物をするところのできる区域を造るようなものです。これが、将来造られる神殿、荒らす忌まわしい者がユダヤ人と結ぶ堅い契約における神殿の姿です。

2B 聖都

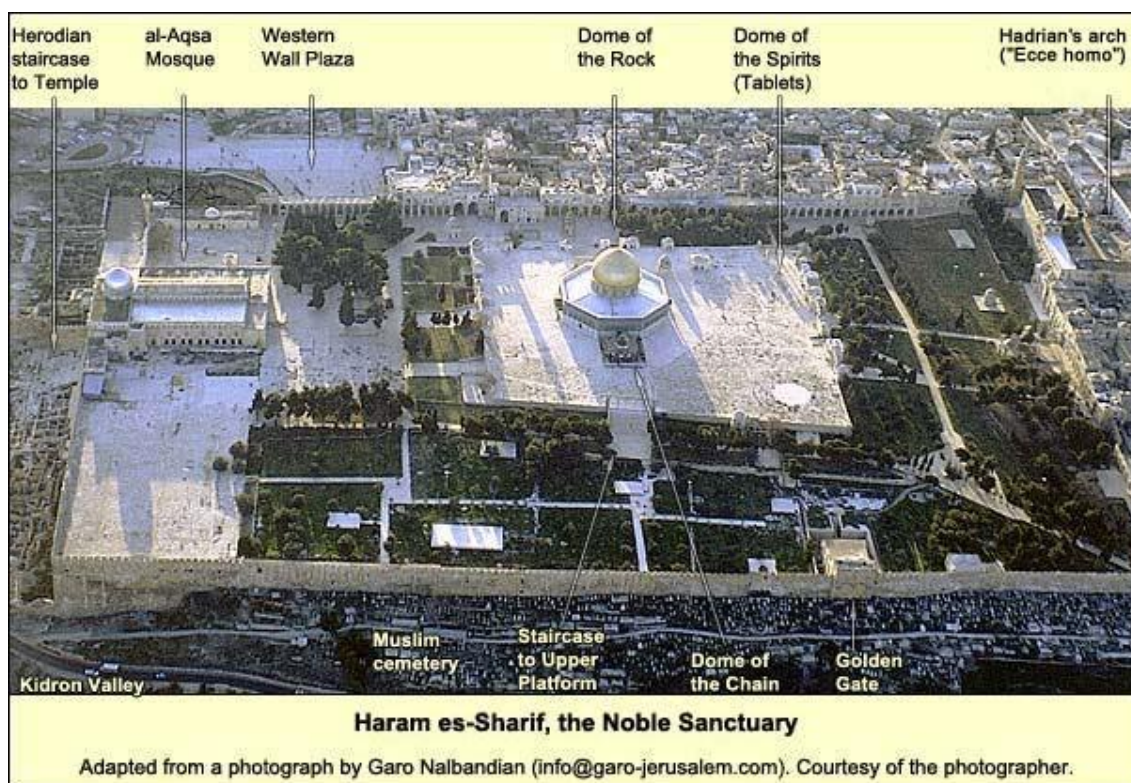
そこで「彼らは聖なる都を四十二か月の間、踏みにじることになる。」とあります。前回、力ある御使いが、開かれた小さな巻物をもっていました。ダニエル書 11 章にて、聖なる民の力が、一時、二時、半時の間、砕かれるという宣言がありました。これは三年半のことです。第七十週の後半の、三年半のことです。初めに、異邦人に外庭を捨ておいていたのですが、ついに、その半ばに反キリストが正体を表して、その再建の神殿の中に入り、我こそが神であると宣言するのです。イエス様が、このことをオリーブ山で警告されました。「マタ 24:15-16 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——16 ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。」パウロは、このイエス様の言葉をしっかりと、新しく信じたばかりのテサロニケ人たちに教えていました。「Ⅱテサ 2:4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」そして、黙示録 13 章で獣の像が造られる、獣の宮があることが啓示されているのです。

私たちは、以前、ダニエル書における学びで、現代イスラエルが、この預言に近づいた情勢の中にあることをお話しました。改めて、説明していきたいと思えます。ユダヤ人にとって神殿を建てるのは、主の選ばれた、お定めになったところでなければいけません。ダビデがエブス人アラウナから購入した打ち場が、そこであるとダビデは示されました（Ⅰ歴代 22:1）。そこにソロモンが神殿を建て、そしてバビロンによって滅ぼされた後も、同じ所に神殿を再建しました。そしてヘロデ大王の大改築によって、同じ地点に建てています。

そしてローマによって紀元 70 年に神殿が破壊されて、それからイエスが言われた「異邦人の時」を迎えます。「ルカ 21:24 人々は剣の刃に倒れ、捕虜となって、あらゆる国の人々のところに連れて行かれ、異邦人の時が満ちるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」私たちは、エルサレムが異邦人に踏み荒らされる歴史を認めていくことができます。ローマの次はビザンチン朝の支配です。ビザンチン時代とは、国教化されたローマ、東ローマのことです。次にイスラムが支配しました。それから、十字軍が遠征してエルサレム王国をたてます。次に、再びイスラムが。そして、エジプトからのイスラムの勢力、マムルーク朝が支配します。そして、オスマン帝国が支配します。今のエルサレムの旧市街は、オスマンのスレイマン帝が建てたものです。そして近代に入り、国際連盟によって、英国が委任統治をすることになります。このようにして、異邦人の勢力によって踏み荒らされたことを見ました。

しかし、1948 年、イスラエルが独立して主権国になります。すぐに独立戦争が勃発しました。戦争には、イスラエルがアラブ諸国に勝利したものの、エルサレム旧市街はヨルダンの手に渡りました。しかし 1967 年、六日戦争が勃発します。そこで、イスラエルがエルサレムを奪い帰しました。この時、嘆きの壁のところに行って、ユダヤ教のラビもそこに入り、角笛を鳴らして、二千年近くの

時を経て、エルサレムがユダヤ人の手に入ったことを覚えたのです。ところが、時の国防大臣、モシェ・ダヤンが神殿の丘はそのまま、ヨルダンのイスラム組織ワクフ(Waqf)に明け渡したのです。そこで神殿の丘は、二重の管理になりました。治安はイスラエル当局が担当しますが、神殿の丘そのものはイスラムの支配の中に今に至るまでであるのです。

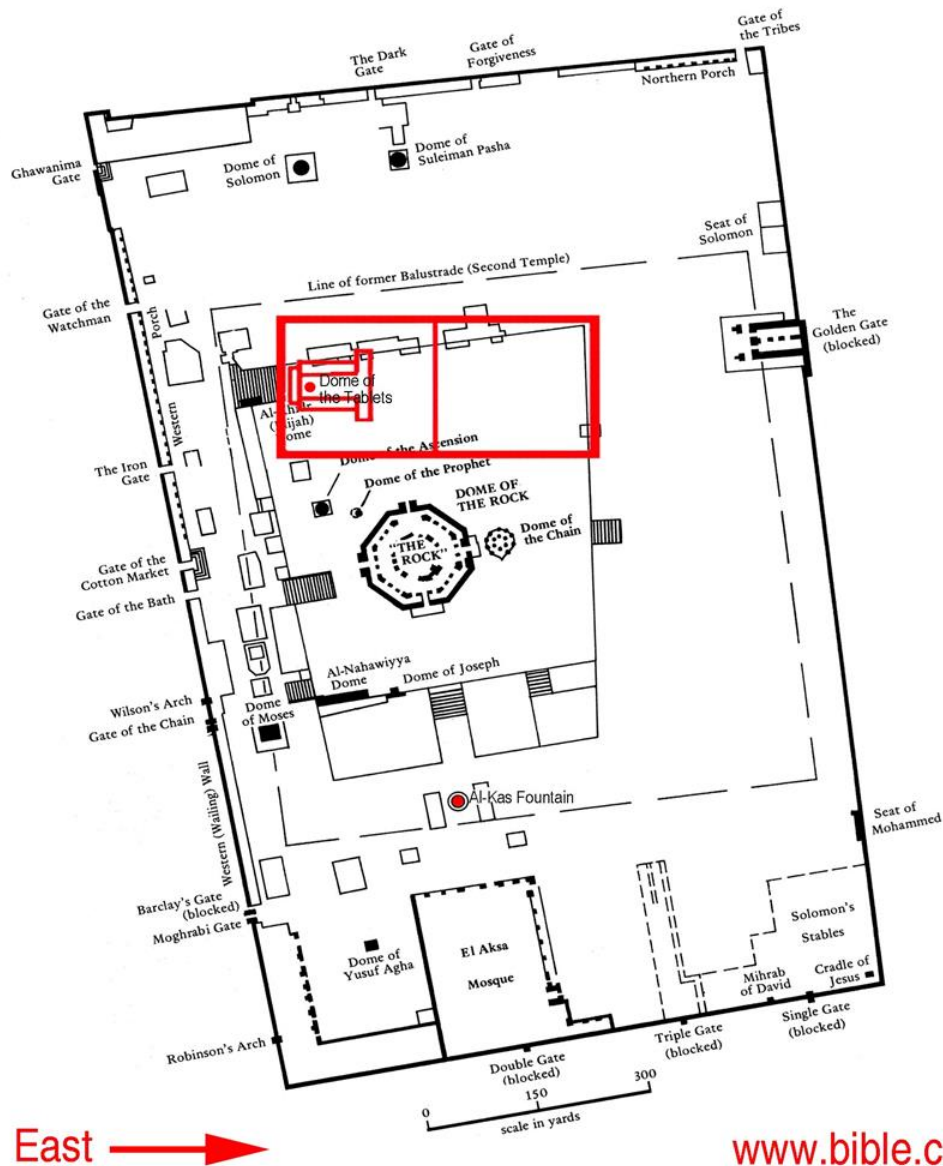


ですから、本当の意味でエルサレムが、異邦人の時を終えたとは言えないのです。ユダヤ教の人が、ここで祈りを献げるものなら、暴動が起こります。イスラエルの治安当局が暴動を起こしている者を取り締まるために、その衝突で流血が流れるのです。ここで一大事が起これば、世界中のイスラム教徒が怒り狂うことになるほど、世界的な宗教対立が起こりえるほどの火種なのです。

ところで、ユダヤ教の人たちは、神殿について「メシアが来たら、メシアが神殿を建てられる。」と信じています。ですから、自分たちで積極的に神殿を建てようとは思いません。けれども、一部にこう考える人々がいます。「イスラエルの国も、メシアが来てから建てられると我々は信じてきた。しかし、ユダヤ人の手によって、神がそれを用いて国が生まれた。同じように、神殿の再建も、ユダヤ人の手を動かして、初めて成し遂げられるものであり、主はそこで再臨される。」という考えなのです。この人たちは、熱心に神殿再建の準備をしています。イスラエル旅行に何度か行っている中で、立ち寄っているのは、「神殿再建財団」"The Temple Institute"です。彼らは、神殿に使用する祭具を作っています。大祭司の祭服、臨在のパンの机、そして金の燭台、メノラーを造りました。それを嘆きの壁の近くに動かして、いつか神殿の丘の敷地内に持っていく日を夢見ています。

そのような考えを持っているユダヤ教徒の人たちが、神殿の丘に入って祈りを献げることを望んでいます。普通、ユダヤ教徒は、嘆きの壁では熱心に祈りますが、神殿の丘にはかつて聖所があったのであり、誤って、祭司や大祭司しか入れない聖所を踏みつけてしまっはいけないとし、そこに入りません。けれども、自分たちで神殿建設に関わることを熱心に願っている彼らは、そこで祈りを献げようとするのです。けれども、先に申し上げたように、暴動が起こってしまいます。けれども、今、徐々に、イスラム当局ワクフとの交渉で、イスラエルの治安警察が同行することによって、中に入れているという状況です。

Herodian Temple: Holy of Holies over Dome of Tablets (Asher S. Kaufman's view, 1983 AD)



そしてこれもお話しましたが、岩のドームの中に至聖所の契約の箱が置かれていたと言われ

ているモリヤ山の床岩があると言われていいます。それが一般的な見解です。そこが、神殿が建てられていた場所だと思われています。ですから、神殿を建てるためには、岩のドームを取り除かなければできないと言われていいます。

けれども、上空から見た神殿の丘を見ると分かりますが、東の城壁に「黄金門」と呼ばれる門があります。そこは、かつての「東の門」の上に建てられているはずだと言われていいます。その東の門から直線に神殿が建てられているはずなのです。ところが、岩のドームは直線の西にないのです。もっと南にあります。

岩のドームよりも、少し北側にある「霊のドーム」あるいは「板のドーム」と呼ばれる小さなドームがあります。そこからちょうど東に黄金門があります。そして、そのドームも、元のモリヤ山の床岩が見えるところです。そこで、もしかしたら、ここが至聖所のあった場所、契約の箱が置かれていた場所ではないか？ということです。



そうしたら、政治的解決が可能です。つまり、神殿をここに立てても、岩のドームを壊す必要がないということです。神殿の南の部分はそのままイスラム教の管轄下に置き、分離壁でも作れば、隣り合わせで神殿を建てることのできるというものです。実際に、イスラエルとパレスチナの仲介に入った、時のクリントン大統領が、両者の分離壁のことを提案したことがあったそうです。もしそうであれば、異邦人に外の庭を差し置いて、それで内庭だけが神のものとする事で、妥協することができます。



本日は内容が、かなり豊富だったので、続きは次回に回したいと思います。

世の終わりが、惑わしの時代であります。ユダヤ人たちの中に、神の回復の願いがあります。もちろん、これは私たちキリスト者にもあります。しかし、その回復の願いがあるのに、妥協も入りません。その妥協によって、あたかも回復したかのような体裁を取ることができます。神殿が建てられるのです。けれども、それが悲惨を招くということです。イエス様が、彼らが偽のメシアを受け入れてしまうことを、ヨハネの福音書で示唆しておられました。「ヨハ 5:43 わたしは、わたしの父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れません。もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を受け入れます。」

私たちキリスト者も、今、ガラテヤ書で学んでいるように、神の約束を願っていて、その実現を自分たちの手で成し遂げようとする、肉で完成させようとする誘惑があります。その中で、ガラテヤの人たちが信じる前の慣習と同じような束縛に戻っていくように、世の中のものを教会に取り入れてしまうことがあり得るのです。

2A 二人の証人 3-6

1B 二本のオリーブの木 3-4

2B 災害を与える力 4-5